令和 8 年度大阪市子ども読書フォーラム 記録
「10 代と読書の距離を縮めるヒント～家庭・学校・図書館・地域で支える読書のきっかけ～」

1. 講演「子どもが楽しく読みはじめるために なにができるか～おためし読書（読書回転寿司）の記録から」

片岡 則夫氏（公益財団法人図書館振興財団）

◆清教学園中・高等学校の図書館と探究学習

・「子どもが楽しく読みはじめるためになにができるか」について、この春まで探究科の教員として勤務していた清教学園中学校・高等学校での「おためし読書（読書回転寿司）」の実践事例を中心に紹介する。

・清教学園では探究学習を積極的に行っており、子どもたちが自分で学びたいものを探究して論文を作成している。調べる際にはインターネットも使うが、やはり本が大事。生徒たちの論文も学校図書館の本棚に蔵書として並んでいる。

・探究学習で一番大事なことは、そのテーマに興味があるかどうかである。興味を見つけるまでに時間が必要だが、興味を持ったところに本を手渡すと、子どもたちは主体的に学ぶ。中学1年生の頃から小さな調べ学習や「おためし読書」をしながら、学校図書館をだんだん味方につけて、高校の探究学習へとつなげている。

◆おためし読書（読書回転寿司） 子どもと本が出会う工夫

・「おためし読書」とは、面白くて読みたくなるような本を目の前に置けばよいという考え方を基本にしている。具体的には、机の上に本を 5～6 冊置いて、5 分くらいで読む。読んだら、借りたくなったか等、簡単な記録を取る。感想は求めない。これを繰り返すので、「読書回転寿司」とも呼んでいる。

・中学 1 年生のフィクションの場合は、1 時間で 3 冊ずつ手渡し、5 分ごとに回していくことで、50 分で一人約 18 冊の本と出会える。回す本は文庫本や名作など、いろいろなものを学校司書が選書している。ノンフィクションの場合も、総合学習の時間に 1 時間で実施している。

・生徒は回ってきた本を読み、予約カードに記入する。2015 年度の例では、ノンフィクション 66 冊・フィクション 113 冊に予約がつき、一人 1 冊くらいは借りる状況となった。生徒の記録から、おもしろかった・おもしろくなかった等を点数化して人気があるものをまとめたのが配付資料のリストである。

・フィクション編は、上位作品の支持が非常に高い。例えば、1 位の森絵都『カラフル』は「中学 1 年生 12 人、人気度 95.8」となっており、12 人が読んで約 11 人が「借りたい」と思ったことになる。人気度は平均点で、上位 7 位まで 90 点近い作品があり、男女それぞれ好みはあるが、上位の本を目の前に置けば、かなり高い確率で読みたくなることがわかる。

・ノンフィクション編は、全般的に幅が広く、フィクションより点数が下がりがちだが、好まれるジャンルが分析できる。例えば、人間関係（友だち、マナー、アサーション等）」の本。「好きでもない友だちにノートを貸してほしいと言われた時」など、対人関係のハウツーが書いてある本に需要があることがわかった。学校図書館ではこのジャンル（1 類）はわかりにくいところに並んでいるので、学級文

庫に置くと有効である。

◆なぜ「おためし読書」なのか

・「おためし読書」は、図書館の本棚に本が並んでいても、その背表紙を見て自分で本を手に取ることができない子が多くなっているという認識から始めた。本を読まない、不読率が高いというのなら、本と出会う確率を高めればいい。小学生では読書が好きな子が約 7 割いる。本や読書は好きだが面白い本が手元にないから読まないだけ、と考えれば、面白そうな本を狙いすまして子どもの前に積み上げていきたい。

・読書には、アクセス（接続）、チョイス（選択）、タイム（時間）の 3 つが必要と言われている。学校図書館に面白い本があって工夫さえすればアクセスもチョイスも問題ない。しかし、いまの子どもたちにはタイムが無い。「おためし読書」は、アクセス、チョイス、タイムを同時にその場で実現させる試みである。これが「おためし読書」の意義の 1 つである。

　2 つ目は、「子どもたちをつかむ本棚」を短時間で安価につくる手がかりが得られること。

　3 つ目は、図書館スタッフが本を選ぶ時の選書眼を養う機会になること。名著中の名著が意外と読まれたり、面白いから絶対読んでくれるだろうと思っていた本がスルーされたり、いろんなことが起こる。子どもたちの反応で、どのような子にどの本が響くのかを学ぶことができる。

・「おためし読書」は小学生から可能である。小学生の場合、低学年のうちは1冊ずつ渡すと良い。ぜひお試しいただき、実践の結果を教えてもらえるとありがたい。

2. 事例報告「友渕中学校「絵の本ひろば」の取組について」

福本　碧氏（大阪市立友渕中学校教諭）

高垣　多恵氏（友渕中学校元気アップ地域本部・地域コーディネーター）

・都島区の友渕中学校で行っている「絵の本ひろば」と「青空図書」について紹介する。共通点は「生徒のそばに本のある場所を作ること」で、生徒と本との距離を縮めることを目的として取り組んでいる。

・「絵の本ひろば」は、2018 年からスタートし、2023 年からは全学年の国語科の授業に導入する形で実施しており、休日には地域への一般開放も行っている。

・学校図書館の机や椅子を移動し、300～400 冊の本を表紙が見えるように並べ、普段とは違う広い空間をつくる。設営作業はボランティアや教員と一緒に図書委員等の生徒が行う。ポスター作成などの PR 活動も図書委員が行っている。

・国語の授業では、最初に 5～10 分程度、「絵の本ひろば」に置いてある本や楽しみ方を説明し、その後は自由に本を読む時間としている。絵本だけでなく、写真集や文字のない本など、読むのが苦手でも、子どもから大人まで誰でも楽しめるような、力のある本を選書している。

・生徒は好きな本を自由に選び、座ったり寝転んだり、友だちと一緒に読んだり、それぞれ自由に本を楽しむ。友だちとワイワイガヤガヤしながら読んでいい。多少騒がしくても、他の子は自分の本に集中していて気にしていない。本に集中したりワイワイしたりを、行ったり来たりしながら時間を過ごす。

・生や死、戦争などをテーマにした本も少し紛れ込ませており、「スパイス本」と呼んでいる。思春期の年齢なのでよく手に取られる。
・昼休みや放課後にも開放している。教室に入りにくい生徒や支援学級の生徒が利用できる時間も別に設けている。
・休日の地域開放では、地域の子どもや家族が参加している。生徒も運営ボランティアとして参加し、地域の子どもに寄り添って一緒に本を楽しむ姿が見られるなど、本を通じて世代を超えた交流の場になっている。
・教員の立場からみると、普段学校で生徒たちは決められた選択肢から選ぶことや、授業で必ず答えや成果を求められることが多いが、「絵の本のひろば」はそこから解放されて、自分のペースで過ごせる安心感がある。本の選択や読み方、読む姿勢、一人で読むか友だちと読むかなど、すべてを生徒自身が自由に決めることができる。学校図書館へ行く抵抗感が弱まり、本との距離が近くなったと感じている。図書館や本が身近になるきっかけになっている。
・「青空図書」は、正門付近のピロティで 1～2 日間、学校図書館から 300～400 冊の本を移動して並べる取組で、学期に 1～2 回実施している。図書委員やボランティア、学校司書、教員が面白いと思う本を選んで並べている。
・下校時間に合わせて開催しているので、帰るついでや部活の前に、生徒が立ち寄ってくれる。気軽に本を手に取れるよう、「立ち読み OK」と呼びかけながら、貸出・返却も行っている。
・学校図書館がアクセスの悪い場所にあり、生徒たちは休み時間や放課後も忙しいことから、図書館自体を移動させ、生徒と本の距離を物理的に縮めるという発想で「青空図書」を始めた。普段図書館に来ない生徒も、友だちに誘われたり、帰宅途中に立ち寄ったりして、本を手に取るきっかけとなっている。また、「青空図書」で借りた本を返すのが、学校図書館に行くきっかけにもなっている。
・「絵の本ひろば」や「青空図書」の取組では、生徒と本との距離を物理的に縮めるだけでなく、子どもの気持ちや感覚に寄り添い、子どもの心の近くに本を寄せることを大切にしている。子どもたちに自分の感覚で本を選び、自由に読む経験を重ねることで、本を身近に感じてもらいたいと考えている。
・読書は、中学 3 年間頑張ればよいというものではなく、一生ものである。彼ら彼女らが親になった時に、今度は自分の子どもと一緒に絵本に出会うことになる。本を間にして過ごした時間や空間が楽しかったという記憶を子どもたちの中に持ってもらえたら一番うれしい。

3. パネルディスカッション

片岡　則夫氏（公益財団法人図書館振興財団）、中西　利恵氏（神戸常盤大学教授）、福本　碧氏（大阪市立友渕中学校教諭）、高垣　多恵氏（友渕中学校元気アップ地域本部・地域コーディネーター）、 進行：戸倉　信昭（大阪市立中央図書館利用サービス担当課長）

戸倉　　まずは、有識者のお二人に、講演、実践事例の報告についての感想を伺いたい。
中西　　片岡さんの講演も、友渕中学校の実践も、子どもに本を読みなさいと求めるのではなく、子どもと本が出合える環境を大人が作っている、というところが共通していると思った。自分で本を選べて、好きな本を読めばいい、途中でやめてもいいという自由さ。友渕中学校の

青空図書は、手に取りやすい場所に本を持ち出している。絵の本ひろばでは、お行儀よく読みなさいというのがない。子どもというのは「一緒に読む」のが楽しい。10 代というのは、自分が楽しいと思って自分で選ぶ、という時期でもある。それができるような環境というか、しくみを取り入れている。大人が読み方や読む本を決めるのではなく、子どもが自分で決められる。このように、家庭、学校、図書館、地域が子どもの生活の中に、本との小さな出合いをいくつも用意する、そういうことが、フォーラムのテーマである「10 代と読書の距離を縮める」ことにつながるのではないか。

片岡　私の報告も、友渕中学校の実践も、子どもと本の距離を縮める、という試みである。子どもの元に本がやってくるためには、まだまだいろいろな工夫ができるのだろうなと思った。ただそれは、職員の時間も必要だし、司書の勤務時間も必要だしもちろん本も必要。いろいろな条件が整わないとできない。そういった、基礎になる条件整備を行わないといけないのが一点。あと一点は、キーワードの「多様性」。おためし読書では、ランキングの高い本から選べばいろいろな子に届く本はそろうのだが、実はそれが重要なわけではなくて、少数ではあるが刺さる本、というのがある。たとえばノンフィクションの本で、戦国時代の甲冑の本に魅入られた男の子がいたのだが、甲冑の本は多くの子に支持されるわけではない。でも、図書館の中に潜っていけば、自分に刺さる本と出合える可能性があるということがわかるということ自体が、おためし読書で大事なことだと思っている。自分の興味があることを知りたいと思って図書館に行けば、いつも開いていて、人がいて、相談できて、本を手渡してくれる、そういった空間が、いろいろな学校で実現できればいいなと思った。

戸倉　会場のみなさんから質問紙をいただいているので、ピックアップして取り上げたい。まず、「絵の本ひろば」を中学校でやってみようという最初のきっかけを、との質問に。

高垣　私は中学校の元気アップ支援員になる前から、都島小学校で図書ボランティアを続けている。そこでは 15 年前から「絵の本ひろば」を行っており、その良さを痛感していた。自分の子どもは、友渕小学校、友渕中学校に通っていて、「絵の本ひろば」を体験できなかったが、隣り合う校区なのにそれに触れる機会がないのを残念に思っていた。たまたま友渕中学校で PTA 役員を務めた際、人権委員会からイベントのアイデアを求められ、それなら「絵の本ひろば」はと提案し、図書委員会とのコラボで実現したのが始まり。翌年からは、子どもが卒業したので元気アップの取組として、現在に至る。

戸倉　ある程度年数を経て、友渕中学校の中ではすでに形が出来上がっているという段階だと思うが、学校は校長が交代したり教員が異動したりという中で苦労はないのかという質問がある。教員の反対はなかったか、あるいは教員への声かけや働きかけの工夫があれば教えてほしい、といった声も。

福本　反対は特に出なかったと思う。学校行事というよりは、教科（国語）の中で 1 時間とるということで、学校全体を動かしてということではなかったので、国語科の各学年の先生が「いいよ」と言ってくれれば進められると思う。多分、これをやってとお願いすると渋る先生もいるかもしれないが、今年もこういう風にやりますので、くらいの声かけだと「今年もお願いしようかな」と結構気安く言ってもらえる。図書委員の生徒にも手伝ってもらう関係で、図書委員会の担当教員の協力は必要だが、担当教員もそういうものと思ってやってくれている。

戸倉　全ての学年、学級でやるという点がひとつのキモだと思う。次に運営に関わっての具体的な質問。ダンボールを使った展示棚（面展台）は専用のものがあるのか、自作できるのか。また、面展台の準備など、開催費用は掛かっているのか。

高垣　面展台は専用のものだが、段ボールを買ってきて手作りする。この会場を出た所に置いているのは市立図書館のもので、頼めば借りることができる。本は学校の蔵書と市立図書館からの団体貸出でまかなっているため、費用は 0 円。ポスターや地域に配布するチラシは学校元気アップ地域本部の予算で印刷している。

戸倉　以前市立図書館でも面展台の作り方講座を行ったことがある。段ボールと角材があれば簡単に作れる。次の質問は、多くの方が感じておられることかもしれないが、「絵の本ひろば」で展示しているのは絵本などビジュアルな本だが、次の段階として、文字の多い本を読むということにつながるのか、また、絵本を読むことが小説などの読書に結び付くのか、さらには、この取組によって生徒たちが普段から読書をする習慣につながっているのか。

福本　一概に、「絵の本ひろば」をやった結果、子どもたちが本をよく読むようになったかと言われると怪しい部分が大きい。ただ、普段本を手にすら取らなかった子どもが、絵の本だったらとか、図鑑だったらとか、これくらいならと手に取る回数は格段に増えた。友渕中学校でも朝の読書活動を週 3 回しているが、「読みなさい」という場面になると途端に読まなくなるように感じている。大人が意識して文字に移行させようとか本を読ませようというのを出してしまうと、子どもは逃げていく。私は、本を読むといいことあるよという声かけや、自分が読んで面白かった本の話はするが、「読みなさい」とは言わない。そのほうが、子どもたちは本に手を伸ばしやすくなると思う。「絵の本ひろば」でも、ビブリオバトルをした時も、本が苦手な子も頑張って取り組んでくれた。抵抗感をなくす、心理的な距離を縮めることができたのかな、と。ちょっとしたきっかけになったのではと思う。それが後々、大人になるにつれて、読んでみようという気持ちにつながればよい。中学生の段階でいま読ませるというよりは、将来生きていく中で少しでも本を手に取る機会が増えたらいいという、長い目で見て取り組んでいる。

高垣　この会場におられる方は、おそらく本が大好きな人たち。ただ、学校現場には本がすごく苦手とか、本が怖いという子どもがいる。子どもに本について聞くと「本を読むのはめんどくさい」とよく言われるのだが、その言葉の裏側にあるものはそれぞれの子によって違うと思う。言葉を読む、文字を読むのが苦手なのかもしれない。他の子と比べて読むのが下手ということかもしれない。そのことで良い評価をもらえなかったことにより、自分から読書に距離を置いている子どもが結構な率でいるのではないか。本が好きだが体育は苦手、逆に体育は得意だが読書は苦手といった子どももいると思う。全員が一律にどこかを目指すというよりは、それぞれの子どもたちがそれぞれのペースで。本を読むきっかけは人それぞれで、私の知人には本を読み出したのは 20 歳を超えてからだが、今やびっくりするぐらいの本好きで、雑誌『ダ・ヴィンチ』を創刊号から全号持っているくらいの本オタクもいる。それは 20 歳になってからのこと。福本先生もおっしゃったが、今結果を出すのではなく、それぞれの子どもの心や背景にあるものを想像しながら、今を楽しむ、ということに特化した場所があってもいいのではないか。いつもいつもというのが難しいかもしれないが、年に 1 回くらいはそんな場所があってもいいのではと思う。

中西　友渕中学校の取組は、10 代の生活の中に本への入口を作るという点で、すごくいい取組だと思う。絵本も写真の本も、ページをめくるたびに場面が変わって、物語が視覚的に展開していくという特徴がある。活字の小説は、1 ページ読んでもなかなか話が進みませんよね。それでだんだん飽きてきたり。絵本は、ページをめくるたびに新しい場面があらわれるので、本を読むのに慣れていない子や長い文章を読むのが苦手な子も興味を持続しやすい。10 代というのは、友情とか家族とか、生き方とか、戦争と平和とか、多様性とか、そういうことにすごく興味がある。絵の本だからこそ、そういったことを短い時間で深く考えられるというメリットもあると思う。それを、ある空間で、一人でも楽しめるし複数でもというように、それぞれのペースで自由に楽しめる。私たちはともすれば読書推進につなげたいなどと思ってしまうが、まずは本を間にした場づくり、本との出合い直しというか。幼稚園保育所の間は絶対に本を読んでいるはずで、そのように位置づけて機会を作っているというのがすごいなと思った。

戸倉　おためし読書への質問。フィクション編人気本リストを見ると、ライトノベルやマンガ、映画のノベライズが入っていない。これは人気がないのか、わざと入れなかったのか。

片岡　マンガは入れていない。なぜかというと、以前『サバイバル』シリーズを入れた時に、マンガには圧倒的な訴求力があってみんなそればかり読んじゃう。そうすると、その他の本との出合いがなかなか実現しないので、普段出合わないけれど面白い本と出合ってほしいということで、マンガはリストから外すようになった。もちろん、ラノベやノベライズ化に一定の需要があるのは確かだが、あまり積極的に購入しておらず、むしろ生徒たちが読み終わった本を寄贈してくれるので、それでまかなっている。

戸倉　デジタル書籍についてどのように考えているか、という点について片岡さんに。今日はおもに紙の本が登場する話だったが、教育現場での ICT 活用などの課題がある中でデジタルの読書をどのように考えればいいかという質問かと思う。

片岡　デジタルについて語れるほど自分の経験がない。キンドルファイアを買ってみたこともあるが、うまく動かなかったのでほとんど読まないまま置いている。大学生など電子書籍でマンガを読んでというのはもちろん承知している。また、探究学習の場面でも、生徒たちがデジタルになった論文や資料などをよくダウンロードして使っているし、政府の報告書などは結構まとまっているものが多いので、使えるときは使っているという感じである。では、小説を読むときに電子書籍を使っているかと言われると、今の中高生が使っているような感じはあまりしない。実は、うちの高校の生徒の（卒業論文の）作品を全てデジタル化して、デジタル作品図書館というのを作ったが、誰も使ってくれない。本棚に実物があるならそれを見る、と。確かにそうだな、と。

戸倉　中西さんに。普段から学生と付き合いがある中で、デジタルについてお感じのことがあれば。

中西　デジタル、というかスマホはすでに生活の一部、身体の一部になっていて、離れていると落ち着かないという感じ。スマホを横に置いて本を読みなさいと言ってしまうと、本がスマホの敵みたいで。そうじゃなくて、第 5 次計画にも位置づけられているが、（紙とデジタルの）どちらかではなく双方を活用できるというのが大事だと思う。動画で興味を持ったことが本につながることもある。その子が今何に興味を持っているかということを知ったうえで、

紙からデジタル、デジタルから紙を自由に行き来できるような、そういうのが現実的ではないかと感じている。

戸倉　時間も限られているので、あとは質問の紹介のみ。「今回は学校で子どもと本を近づける取組事例でとてもいいと思ったが、家庭で本を近づけるいい方法があれば教えてほしい。家には本がたくさんあるがなかなか手に取ってくれず苦戦している」という保護者からのご意見。「保護者も二極化しているので、本に興味のない保護者にPRする方法はないか。共働きも増えており、実際（読書に時間を割く）余裕がない」という声。これは、計画には「効果的に進める」としか書けなかったが、計画期間中にいろいろな方法を考えながらアピールしていきたいと考えている。アイデアがあればぜひお寄せいただきたい。
最後に、コメントを登壇者からお一人ずつ、今日のフォーラム全体を通じたコメントをいただきたい。

高垣　今日の報告はそれぞれ、子どもに本を読ませるのではなく、子どもの近くに本を置きにいく、そういった環境を作るということに注目されているということがとてもうれしく感じた。おためし読書も面白い取組だと思った。自分ならどれを選ぶかと思いながらリストを拝見していた。最後に司会が紹介した「家庭」ということについて、本に興味のない親御さんもたくさんおられると思う。そういう方に「子どものために本を読んであげてください」というのは、共働きやきょうだいもいるという家庭の状況の中では、とても負担が重い。絵の本ひろばのような場所でもよく相談を受けるのだが、子どもに一生懸命本を勧めるのではなくて、まずは保護者の方を楽しませてもらいたいと思う。親に本の楽しさを知ってもらう。親がページをめくるときに笑顔になったら、それだけでいい。そのような姿が子どもの記憶に残るだけで、本に対する距離感は縮まっていくのではないかと思う。「絵の本ひろば」の一般開放でも、私は保護者の方に本を勧めるようにしている。

福本　友渕中学校で「絵の本ひろば」「青空図書」の取組は、地域ボランティアの支えがあってこそ成り立っている。私が国語科、また図書委員会の担当だからこそできることもある。学校によっては、ハードルが高いな、他の先生に頼みにくいなといったことはたくさんある。自分のフィールドでできること、今の現場でできることをささいなことからでも取り組んでいただければと思う。今回の事例報告がちょっとしたきっかけになればと思う。

中西　家庭での読書は、家族が子どもの興味に共感するということから入るのがいいと思う。全体を通じては、「いかに読ませるか」から「どんなふうに出合えるようにするか」という、いわば発想の転換なのかなと思う。最終的には、子どもたちが本を選べる、試せる、立ち寄れる、誰かと共有できるといった環境をどう作るか。それは、第 5 次計画の 3 つの観点、読書環境、普及啓発、そして人とのつながり、これがポイントになるのかなと思う。

片岡　計画の指標である不読率は、大阪のみならず全国でも数値が上がっている。今までの私の認識は「3.4.5.6」つまり不読率が小学校 3 割、中学校 4 割、高校 5 割、大学生・大人 6 割だったのが、「4、5、6、7」になってきたと感じる。なぜ不読率が上がるのかというのは、先ほど言及した「アクセス・チョイス・タイム」の中のタイム、つまり時間の奪い合いが原因だと思っている。サブスクや SNS、ショート動画、ゲームなどでいまの子どもは時間を溶かす。夏休みに会った子どもは「ショート動画を見て 2 時間、時間を溶かした」と言っていた。このように時間を溶かしていくコンテンツがたくさんある中で、ひじょうに苦しい戦いだと思

う。議論になるだろうということを承知で言うが、マンガを復権させたほうがいいのではという気がしている。学校図書館はマンガに冷たい。公共図書館もそれほど予算を使っていない。だが、マンガを読む子どもは本も読むというデータもある。本という形態の中のマンガ、強引に言えばマンガも絵の本ですから、それを子どもたちが手に取るということがあってもいいのでは。それから、タイムの保障としては、朝読が減っているというのがとても不安で、朝読はやらないとまずいと思う。ただ、やっても形骸化してただ単に時間を使っているというのではなく、そこに面白い本を投下してくというのは学校図書館の仕事なので、そこが連動して充実いけばいいと思う。あと一つ、タイムの問題は、図書館や読書推進のメンバーだけで頑張ってもどうしようもないと思っていて、SNSをやめさせようという他の国の動きもあるが、もっと大きな目線で子どもの情報環境をどうすればいいかということを考えないと、不読率の高まりはなかなか止められないのではないか。たとえば健康面から子どもの時間確保について考えていく、といったことも必要だと思う。

戸倉　今日の話は、「読書に対して心理的にハードルを下げる」ということと、「子どもたちの前に物理的に選択肢をたくさん提示する」という 2 点が共通していると思う。おためし読書や絵の本ひろばをそのままやるのは難しいというのも率直な感想かもしれないが、それらのねらい、意図というのを今日お持ち帰りいただいて、それぞれの実践につなげていただきたい。それが、来年以降のフォーラムで新たな報告につながっていくとしたら、第 1 回目のフォーラムとしてはまずは成功と言えるのではないかと思っている。